

学級生活を通して道徳性を育む意義について

学校構想サブプログラム

小林 美理姫

【指導教員】 堀田 香織 萩生田 伸子 内河 水穂子

【キーワード】 教育実践力 実地研究 道徳教育

1. 課題設定

平成 27 年 3 月 27 日に「道徳」が「特別の教科である道徳」として教科化された。小学校学習指導要領でも、“道徳教育は、人が一生を通じて追求すべき人格形成の根幹に関わるものであり、同時に、民主的な国家・社会の持続的発展を根底で支えるものである。また、道徳教育を通じて育成される道徳性、とりわけ、内省しつつ物事の本質を考える力や何事にも主体性をもって誠実に向き合う意志や態度、豊かな情操などは、「豊かな心」だけでなく、「確かな学力」や「健やかな体」の基盤ともなり、「生きる力」を育むために極めて重要なものである。”としている。近年の日本では、道徳教育の充実を重要視していると考えられる。しかし、道徳教育の歴史から、忌避しがちな教員や、必要性を見いだせず軽視してしまう教員も存在する。本研究では、学校生活を通して道徳性を育む意義について考察することによって、道徳教育への理解を深め必要性を感じる糸口としたい。そして、道徳教育の指導の改善につなげていきたい。

2. 道徳性と内容項目

小学校学習指導要領では、道徳性とは“人間としてよりよく生きようとする人格特性”としている。その上で、道徳教育は道徳性を構成する「道徳的判断力」、「道徳的心情」、「道徳的实践意欲と態度」を養うことが求められている。現在では、児童が主体的に道徳性を養うことができるように、「考える道徳」、「議論する道徳」への転換を図っている。このような道徳の授業を行うためには、児童に考えさせる内容を教員が把握する必要がある。「特別の教科である道徳」では、学習の基本となるものとして、内容項目を提示している。この内容項目は態度や心情に関するもので構成されている。

表 1 小学校における道徳科の内容項目

A 主として自分自身に関すること
「善悪の判断、自律、自由と責任」「正直、誠実」「節度、節制」「個性の伸長」「希望と勇気、努力と強い意志」「真理の探究」
B 主として人との関わりに関すること
「親切、思いやり」「感謝」「礼儀」「友情、信頼」「相互理解、寛容」
C 主として集団や社会との関わりに関すること
「規則の尊重」「公正、公平、社会正義」「勤労、公共の

精神」「家族愛、家庭生活の充実」「よりよい学校生活、集団生活の充実」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」「国際理解、国際親善」
--

D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

「生命の尊さ」「自然愛護」「感動、畏敬の念」「よりよく生きる喜び」

道徳の内容には決まった正解がないため、児童に考えさせる余地がある一方で、教員の主観によった誘導がおこなわれやすいと考える。誘導を防ぎ、児童が主体的に道徳性を養える授業を行うためには、教員一人一人が道徳性と教材に対する深い理解が必要である。

3. 研究の方法と考察

本研究では、小学校における道徳の内容項目について、5 つに絞って①実地研究での実践を通して、道徳教育の指導の改善について考察し②文献研究を通して、道徳性を学ぶ意義について考察していく。

①道徳教育の指導の改善についての考察(実地研究での実践を通して)

①-1 内容項目：「善悪の判断、自律、自由と責任」

この項目では、善悪を的確に判断し、正しいと信じることに従って主体的に行動すること、自由を大切に、それに伴う自律性や責任を自覚することを扱っている。主として自分自身に関することとして扱われており、主体的、自律的に判断し実行することが重要視されていると考えられる。

内容項目：「希望と勇気、努力と強い意志」

この項目では、目標を持って、努力をし自分を向上させることを扱っている。主として自分自身に関することとして扱われており、自分を高めていくために、夢と希望を掲げ、勇気をもって困難を乗り越え、努力ができるようになることが重要視されていると考えられる。

「善悪の判断、自律、自由と責任」の授業実践

実地研究で実際に第 2 学年の 3 学級で「善悪の判断、自律、自由と責任」の授業を行った。利用した教材は、教育出版の道徳の検定教科書、題材名は「つよいこころ」である。この題材には、「勇気」を出すときについて考える部

分がある。「善悪の判断、自律、自由と責任」と「希望と勇気、努力と強い意志」の二つはどちらも主として自分自身に関する事として扱われており、他人の意志ではなく、自分自身の意志で行動することに重きを置いている項目である。「善悪の判断、自律、自由と責任」で養いたい力は善悪を判断する力であり、「希望と勇気、努力と強い意志」で養いたい力は自分がやるべきことを考える力である。勇気を出して正しい行いをする際にはそのどちらの力も必要になる。そのため、どのように善悪を判断する力に焦点をあてて児童に考えさせるかが課題であると考えられる。

実践を通しての考察

実践を通して考えるべき点が2点あった。1点目は焦点をあてる部分についてである。導入で、勇気を出す場面を考えていき、勇気を出すために必要な「つよいところ」について考える流れを予定していた。しかし、すべての学級で勇気を出すことに意識がいきなり、最後の振り返りの感想でも、勇気の大切さについて記述している児童が多くなった。

2点目は、授業内で触れることができなかった要点についてである。正しい行いをする事は、難しいことだが、できるとすがすがしい気持ちになることについても考える要点であった。しかし、行動するまでの感情については話ができたが、行動した後の感情については触れることができなかった。そのため、「〇〇な気持ちになるから、正しいことをしたい。」のような、内的な気持ちからの感想が引き出せなかった。

児童にとって、題材に書かれている「勇気」という言葉や、普段の行動はイメージがしやすい。しかし、道徳では、考えるべき道徳性について直接的に書かれていない場合があり、教員が児童に対して気づく手助けをする必要がある。児童が自ら気づき、考えられる環境を作るには、教員の教材に対する深い理解が重要である。教材がなにを主題にしているのか。そして、その教材を自分が使うことで、何を児童に伝えることができるのか把握し考えることが必要である。その上で、児童と共に教材について考えることのできる環境を作るためには、教材だけではなく、児童理解も必要である。児童の発達段階に対する理解や、学級での様子や雰囲気把握することで、児童にとって伝わりやすい伝え方が検討できると考える。教員が道徳性について、考え、児童にあった形で伝え共に考えることで、「考える道徳」、「議論する道徳」が生まれると考える。

①-2 内容項目：「家族愛、家庭生活の充実」

この項目では、家族との関わりから父母や祖父母を敬愛し、家族として家庭のために役立つことを扱っている。主として集団や社会との関わりに関する事として扱われており、家族のために役立つ喜びが実感でき、家族や家庭生活を大切にしようとする気持ちを深め、よりよい家庭を築けるようになることが重要視されていると考えられる。

家族の形の多様化

教育出版が出している道徳の検定教科書では、この項目は1学年に1~2題材で、全学年合わせて9題材ある。そのうち、主に母と関わる題材は4題材、主に父親と関わる題材は1題材、主に兄弟や姉妹と関わる題材は2題材、主に祖父と関わる題材は2題材である。主に母親と関わる題材では、すべて登場人物が母親と子どものみである。また、主に母親と関わる題材を含め、すべての題材で母親が登場する。これは、児童と関わる時間が家族の中で母親が長いことが理由ではないかと考える。国立女性教育会館が行った平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査では、日本の母親は子どもと過ごす時間が1日平均で7.57時間と、調査した6カ国のなかで一番長かった。また、父親は1日平均3.08時間と差が大きい。家族の中で関わる時間が長い母親を登場させることで、児童が題材の場面を想像しやすくする工夫であると考えられる。ただ、家族の形は多様になっている。そのため、児童と母親との関わりが多いとは必ずしもいえない。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説の道徳編には“なお、多様な家族構成や家庭状況があることを踏まえ、十分な配慮を欠かさないようにすることが重要である。”と記載されている。その一方で、学習指導要領解説における、「家族愛、家庭生活の充実」の内容を説明する文章は、どの学年でも「父母、祖父母を敬愛し」から内容が始まっている。2020年の総務省統計局の国勢調査では、子どものいる核家族世帯は、夫婦と子どもから成る世帯の25.1%とひとり親と子供から成る世帯の9.0%の合わせて34.1%となっている。核家族世帯の約1/4がひとり親世帯である。

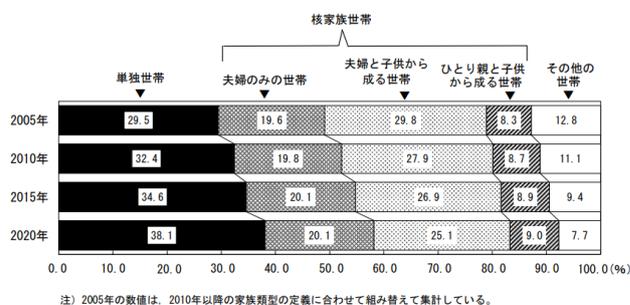


図1 一般世帯の家族類型別割合の推移(2005年~2020年) 総務省統計局(2021)

一方で、その他の世帯に入る、祖父母と同居している世代は減少していると考えられる。そのため、祖父母と関わりが少ない児童も多くなっていくと考える。児童が様々な家族の形をどのように認識し、互いに認め合えるか考えることが、この項目を扱う意義になると考えられる。

家族との関係

教科書では、授業の最後の問いにあたる「深めよう」という問いがある。この「深めよう」で主に聞かれる内容は「家族のためにできること」や「家族の良いところ」である。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説の道徳編でも、この項目の説明を“家族との関わりを通して父母や祖父母を敬愛し、家族の一員として家庭のために役立つこと

に関する内容項目である。”としている。家族に対して良い感情を持っている児童は「深めよう」など、この項目について考えやすいが、そうではない児童は、どのように考えればよいのだろうか。厚生労働省は、令和3年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数を207659件と公表している。

2. 児童虐待相談対応件数の推移

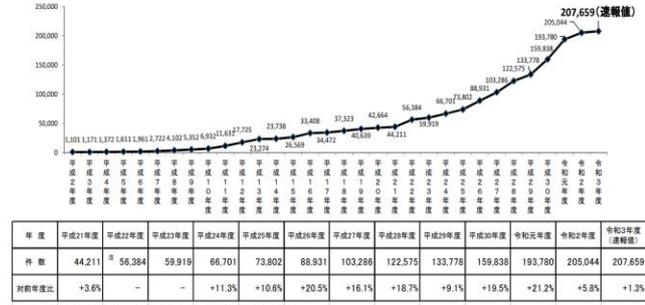


図2 児童虐待相談対応件数の推移 厚生労働省(2022)

虐待だけではなく、家族と良好な関係を築けていない児童も存在するはずである。教員は、そのような児童の気持ちをどのようにくみ取り、その気持ちを踏まえた上で授業を行う必要があると考える。

様々な家族との関係がある中で、この項目は家族を敬愛し家族のためにできることを考えるだけではなく、そもそも家族について考えることが意義になると考えられる。増田ら(2004)は、家族機能と学校適応について述べている。家族機能について、家族メンバー間の結びつきが強い、家庭に自分の居場所があるか、家庭は自分にとって安全な場所であるか、家族が支えになってくれるか、家庭では何でも相談できるかとしている。その結果、心身症の発症や小学校、中学校でのいじめ、不登校の誘因に、家族機能の低下が関与しているとした。さらに、思春期・青年期の対人関係上の問題や生きる喜びにも家族機能の低下が影響を及ぼしていると述べている。自分の家族について考えることを通して、よりよい家庭環境にしていく意欲を育むことが「家族愛、家庭生活の充実」を道徳の時間で扱う意義になると考える。

家族関係と自己肯定感

大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因(河越、岡田)(2015)では大学生計539名に対して質問紙調査を行っている。この研究では、大学生の自己肯定感に影響を及ぼす関連要因として、「学校生活」、「父との関係」、「母との関係」、「親の夫婦関係への認識」の4つをあげている。男性での結果では、父との関係が良好だと充実感が得られ、親の夫婦関係への認識が良いものだと感じると自己肯定感が高まると考えられる。女性での結果では、父親からの愛情を感じ、父母に対して否定的な感情がないことが、自分の自信に繋がり、意欲的に行動できることに繋がると考えられる。

夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差(大島)(2013)では、2006年に日本国内に住む若者とその両親205組、2011年に、男性

のデータを追加し、若者とその両親88組に質問紙調査を行った。この研究の結果では、子どもが両親から支持的な関わりを受けていると認識しているほど、子の自己肯定感と幸福感は高く、抑うつは低くなることが示されている。この研究の結果では自己肯定感への影響は娘だけに見られた結果で、娘の自己肯定感には、両親から支持的関わりを受けたという認識は重要であることが示唆された。

家族との関係が良好だと、自分に自信をもち、積極的に行動ができるようになると考えられる。その結果、学校などで活躍する場が増え、自己肯定感が上昇すると考えられる。「家族愛、家庭生活の充実」の授業を通して、自分の家族について考える機会を作る。そこから、児童が自分の家庭環境を振り返り、家族とよりよい関係を築くにはどうすればよいか考える。自分と家族とのよりよい関係が、自己肯定感の向上に繋がると考えられる。

「家族愛、家庭生活の充実」の授業実践

実地研究では、第1学年の2学級と第3学年の3学級で「家族愛、家庭生活の充実」の授業を行なった。利用した教材は、教育出版の道徳の検定教科書である。

第1学年での題材名は「おじいちゃん だいすき」である。この題材では、主人公の女の子が入院した祖父に対して手紙を書く内容である。その手紙を通して、家族のために何ができるのか考えるものである。

第3学年での題材名は「わたしの妹、かな」である。この題材では、主人公の女の子が自分の妹の行動をみて、家族の良さについて考える内容である。妹のお手伝いに対する主人公の気持ちの変化から、児童自身の家族について振り返るものである。

実践を通しての考察

第1学年での授業では、全体的に児童の反応は良いものになった。主人公の気持ちにはなりながら、手紙を書いたときの気持ちを考えていた。その一方で、祖父の気持ちを想像することは難しさを感じる児童がいた。「おじいちゃんじゃないからわかんないよ。」と発言する児童もあり、これは1年生と高齢者である祖父との年齢が遠いこと、身近に高齢者がいない児童であったことが考えられる。家族の形が変化していく中で、教材に登場する人物や登場のさせ方に工夫が必要だと感じた。前述にもあるが、教材は主人公が祖父に手紙を書く内容だった。そのため、実際の授業で児童にも家族に対して手紙を書く活動をさせ、自分の家族と結びつけて考える機会を作ることも有効な手立てであると考えられる。授業中に配ったプリントは、家族のために自分ができることを書くものにした。多くの児童は「家族のためにお手伝いする。」等書けたが、極端に家族を嫌う児童が1人いた。その児童は、「お父さん大嫌い」とプリントに書き、その上でプリントの裏を黒く塗りつぶしてしまった。このような家庭環境がかならずしも良くない児童に対してどのようにアプローチすべきだったのか悩んでしまった。どうしてこの児童は「お父さん大嫌い」と書いた

のか、どうして黒く塗り潰してしまったのか、児童の行動をどのように捉えるべきか課題が残った。この授業を通して、児童が自分の家族についてどう考えているのか理解する手がかりを手に入れられた。担任教師は児童だけではなく、保護者とも関わる。児童の話だけではなく、「家族愛、家庭生活の充実」の授業を通して、家庭環境の把握や介入の手がかりになるかもしれないと感じた。

第3学年では、兄弟姉妹の話から家族の話に導入で繋げることができた。この授業では、「家族の良さ」とはなにかを考える時間にしたかった。しかし、授業者である私自身が「家族の良さ」とは何かつかみきれなかった。「家族の良さ」とは、家族それぞれの良いところではなく、「家族」であることに対する良さであり、それを児童にどう考えさせるかが課題として残った。第1学年と比較して、第3学年では、家庭とあまり良い関係を築けていないと自認する児童が増えたと感じられた。これは、年齢があがり、児童自身で善悪の判断ができたり、他の家庭との比較によって自分の家庭に対して評価をすることができるようになっていないかと考える。授業中に配ったプリントでは、「家族の良いところ」について書くものを配布した。スムーズに自分の家族について書ける児童がいる一方で、家族の良さについてなかなか書けない児童がいた。そのような児童に対しては、「こんな家族、家庭ならいいなあ」など自分の理想の家庭環境を書いてもらうアドバイスをした。児童の理想の家庭環境を考えさせることで、将来自分がどのような家庭を築きたいか考えやすくなり、家庭生活の充実につながるのではと考えた。

どちらの学年でも、良好な家庭環境にない児童の対応に難しさを感じた。良い家庭環境を作ることやそのような家庭環境で過ごすことによって、健全な成長ができると考える。しかし、実際には良い家庭環境を築けていない児童に対しては、「家族」がすべてではないと伝えて行く必要があると考える。児童の理想と現実とのギャップにどう対応するか課題が残った。

①-3 内容項目：「個性の伸長」

この項目では、個性の伸長を図るために積極的に長所を伸ばし、短所を改めることを扱っている。主として自分自身に関することとして扱われている。ここで扱う「個性の伸長」は、自分のよさを生かしさらにそれを伸ばし、自分らしさを発揮して調和のとれた自己を形成することである。「個性」として自分の特徴を知ること、「長所」と「短所」を見出し、「長所」を伸ばし、「短所」を受け止める姿勢を取ることができるように指導することが重要である。

「個性」の定義

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳では、“個性とは、個人特有の特徴や性格であると言われている。”としている。また、赤堀(2021)は『道徳的価値の見方・考え方』で“「個性」とは、個々の人や事物

に備わっている他とは異なった固有の性格や性質と解されています。”とし、“この「他とは異なっている」ことについては、例えばマイナスの特性を捉えるのではなく、個々のよさを捉えるようにしたいところです。”としている。藤岡(1986)は、心理科学10巻1号の『心理学研究者にとって個性とは何か：教育心理学の視点から』の文章で、金子書房から出版されている新教育心理学事典における「個性」の内容を要約している。

“1) パーソナリティの独自な性質を個性といい、2) 個性研究には対立する2つの立場があって、ひとつはオルポートに代表されるような、「個性は個人が持っている主要な特徴であって、それは他人と共有することのない、その個人特有なものとしてとらえようとする」立場であり、もうひとつはアイゼンクに代表されるような「独自な個人とは多数の変数の交わった点にすぎないという立場にたつて、個性をとらえようとする」立場である。3) 人間が生まれたときからすでに持っている個人差が成長し、社会化が進むに従ってより顕著なものとなる。そして青年期になると、「自我が進むに従ってより顕著なものとなる。そして青年期になると、「自我に目覚め、自己の独自性に気付き、それを伸ばそうとする個性化が進行する」、といったようにまとめられる。”このように、「個性」とは、個人特有または独自の性質、特徴、性格と定義されると考えられ、道徳教育では、その中でも「長所」を捉え伸ばしていくことが大切だと考えられる。

日本の若者と自尊感情

日本の青年は諸外国と比較して、自己満足感や自尊感情が低い傾向がある。内閣府は「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」を行っている。平成25年度の調査では、自尊感情に相当する項目の「私は、自分自身に満足している」について、各回答に「そう思う(4点)」から「そう思わない(1点)」まで1点刻みで点数化した場合、日本の若者の平均値が2.31(満点:4点)であり、日本を除く他国の平均値3.07と比較しても著しく低かったとしている。平成30年度の調査においても、日本の平均値は2.31としており、他国の平均値の多くが3.00を越える中で低い数値となっている。

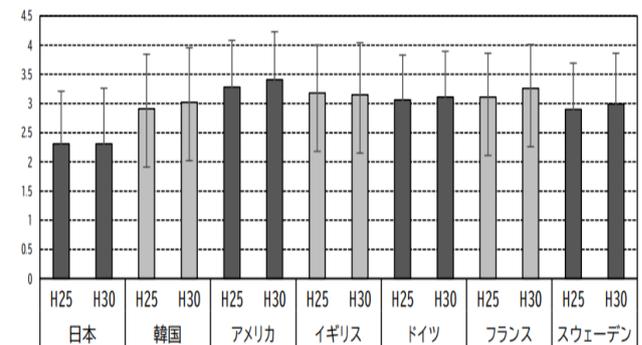


図3 自分への満足感 内閣府(2019)

自分への満足感にはどのような要因が関連するのか、同調

査では下記のように表している。

表2 「自分への満足感」と自己意識にかかわる関連要因の
 相関 内閣府(2019)

	長所	親の愛情	主張性	挑戦心	刹那的	有用感	不信感	負の特性
日本	.607**	.314**	.449**	.446**	.216**	-.315**	-.205**	
韓国	.616**	.461**	.477**	.531**	.497**	-.176**	-.212**	-.123**
アメリカ	.417**	.287**	.408**	.459**	.236**			
イギリス	.495**	.235**	.430**	.479**	.328**			-.064*
ドイツ	.407**	.237**	.368**	.260**	.233**			-.079*
フランス	.498**	.218**	.308**	.288**	.318**			.080**
スウェーデン	.557**	.203**	.420**	.431**	.371**		-.065*	.083**

※空欄は有意な関連がなかったことを意味している。* $p<.05$ 、** $p<.01$

この関連要因の相関から、日本の若者は、有用感と自分への満足感とは負の相関がある。これは、自分は役に立たないと思っていない人ほど、自分に満足している。つまり、自分は役に立つと思っている者ほど、自分に満足する程度が高いということである。自分は集団に対して役に立っていると感じる自分が自己肯定感につながると考えられる。このことを踏まえると、児童の自己満足感を上昇させるために、係活動など学級内で役割を作る。そして、児童がその役割を全うしたときにその行為を教師や周囲の児童が認めてくれる経験をさせることが有効であると考えられる。また、自分の役割を児童が楽しんで全うするためには、児童自身が自分の特徴や得意なことを自覚して、それに合った役割を選択できることが大切であると考えられる。

「個性の伸長」と自己肯定感

大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因(河越、岡田)(2015)では大学生計539名に対して質問紙調査を行なっている。この研究では、大学生の自己肯定感に影響を及ぼす関連要因として、「学校生活」、「父との関係」、「母との関係」、「親の夫婦関係への認識」の4つをあげている。男女に共通して学校生活の人气が最も自己肯定感にプラスの影響を及ぼすとし、友人や教師など、家族以外の人から認められることで、社会の中で認められていると感じ、自分の個性を大切に、自分に自信を持つことができると考えられる。このことから、「個性の伸長」と自己肯定感には、「個性の伸長」を通して自己肯定感が上がるだけでなく、自己肯定感が上がることで、「個性の伸長」にもつながる相互関係を持っていると考えられる。

小学校低学年における児童の自己肯定感を高める授業の試み 一特別の教科道徳と体育の教科横断的な取り組みから一(小出、片岡、荒井)(2021)では、小学校2年生に対して、道徳と体育の授業を通して、児童の自己肯定感を高める試みをしている。この試みでは、事前に質問紙での自己肯定感に関する調査を行ない、授業を行なったあと、改めて質問紙での調査を行なった。道徳の授業は4時間、体育の時間は6時間の計10時間の授業。道徳は「B主として人との関わりに関する事」の内容として、「相手のことを考え、優しく接することができる」、「相手の存在を受け入れ、相手のよさを見出すことができる」を目標としてい

る。体育は、ボール投げゲームの授業を通して、「友人のよいプレイに拍手や温かい言葉をかけること」を目標の1つにしている。授業を通して、事前に行なった質問紙調査の回答と比較して質問項目の全9項目のうち、8項目において、肯定的な回答が増加した。ただし、有意差は見られなかった。自己肯定感の向上には、「個性の伸長」だけではなく、「親切、思いやり」など他の内容項目とも関連していると考えられる。周囲の人を思いやり、良いところを見つけることや、他の人から自分の良いところを伝えてもらうことで、自己肯定感があがると考えられるため、普段の学級活動でも、他者の良いところを見つける活動を取り入れると良いと考える。

性格特徴の言語化が自己肯定感に与える影響(山下、小野)(2017)では、大学生113名(有効回答は97名)に質問紙調査を行なっている。この研究では、自尊感情と自己肯定感の尺度に回答後、質問文の条件ごとに参加者自身が当てはまると考える性格を単語の表から選んで記入してもらう。その後、自尊感情と自己肯定感の尺度にふたたび回答してもらっている。質問文の条件は、自分の良い特徴と思える形容詞のみを記入するもの、自分の悪い特徴と思える形容詞のみを記入するもの、自分の良い特徴と悪い特徴両方の形容詞を記入するもの、友達の良い特徴と悪い特徴両方の形容詞を記入するものの4つである。自分の悪い特徴と思える形容詞のみを記入した場合、無条件に自己を肯定できなくなったと考えられる結果がでた。自分の良い特徴と悪い特徴両方の形容詞を記入した場合は、現実的な自己、あるいは多角的に自己を捉え直したことで、無条件に自己を肯定できるようになったと考えられる結果がでた。また、友達の良い特徴と悪い特徴両方の形容詞を記入した場合でも、自尊感情尺度の得点が上がったため、友達を基準に自分の立ち位置を再確認できたことから、自尊感情の上昇に繋がったと考えられる。このことから、自分の良いところだけではなく、悪いと感じるところを振り返ることで、自己肯定感や自尊感情があがると考えられる。「個性の伸長」の授業を通して、自分の長所と短所の両方を振り返ることで、自己肯定感をあげることに繋がるであろう。また、友達など周囲の人のことを振り返ることも、自分の自己肯定感に繋がると考えられるため、他者の良いところを探す活動も、自己肯定感をあげることに寄与すると考えられる。

「個性の伸長」の授業実践

実地研究では第4学年の3学級と第5学年の2学級で「個性の伸長」の授業を行なった。利用した教材は、教育出版の道徳の検定教科書である。

第4学年の題材名は「ゆめは世界一のプロ野球マスコット」である。この題材では主人公がプロ野球選手での成功を諦めた後、プロ野球マスコットとして再び野球に関わることができるようになったという内容である。「野球」という好きなことを通して自分の夢を叶えた主人公を通して、児童自身の好きなことや長所を自覚し、自分の将来に

ついても考えるものである。

第5学年の題材名は「たからもの」である。主人公が算数の問題につまづき自暴自棄になっているところに、母親が主人公が書き続けた日記から、主人公自身に自分の良さを気づかせる内容である。主人公が母親という他者から、自分の良さを知る場面から、児童同士で相手の良さを伝えるものである。

実践を通しての考察

第4学年の授業では、自分の好きなことと将来の関係について考える時間を作った。まず、自分の好きなことや続けていること、長所を考えてもらった。長所と言われるとなかなか書けない児童が多かったが、好きなことや続けていることについてはたくさん書ける児童がいた。その上で、書いた長所などから将来の夢について関連させて考えさせた。将来の職業など遠い未来は書けない児童には、1年後の6年生や2学期の自分など近い未来について書くようにアドバイスをした。近い未来の夢については書ける児童が多く、「優しいところが自分の良いところだから、下の学年に優しい6年生になる。」といった内容を書いている児童もいた。キャリア教育としての役割も担っており、将来の自分について考える時間を作ることができた。ただ、自分の好きなことから自分の特徴や長所を知るところまでできたかは疑問が残る。最初から長所を書けた児童たちは、自分の長所を再認識する時間になったが、好きなことや続けていることを書いた児童たちの中には、そのことが自分の長所や特徴にどう結びつか分かっていない児童が複数いた。自分の好きなことや続けていることが、将来自分の長所や特徴につながっていくが、それを児童に気づいてもらえるように教材を生かし切れなかった。

第5学年では、自分の長所について他者に伝えてもらう時間を作った。導入で自分の長所と短所について自分自身で書かせた。その時間で、短所は全員が書けたが、長所については空白や「なし」と書く児童が複数人見られた。その後、他者に対してその人の良さをかく活動では、2学級とも活発に活動していたようにみられた。授業中に配布したプリントには、自分の長所を他の人に3人分書いてもらう欄を作ったが、その欄を越えて裏まで書いてもらう児童が複数いた。自分の長所は書けないが、他人の長所は書ける児童が複数人見られた。これは、5年生の2学級どちらでも普段の生活で、他の人の良いところを見つけて発表する活動があり、他の人の良いところや良い行動を見つける力があるからだと考える。その一方で、自分自身の長所や特徴を振り返る機会は日常生活ではあまりないため、自分のことはなかなか書けない児童がいたと考えられる。他の人に自分の長所を書いてもらう経験を通して、「そんな風に思われていたのか。」「自分にはこんな長所があったのか」と気がつくことができた。」などの児童からの反応より、他の人を通じて自分の特徴について知ることができた授業になった。長所の内容について、他の人に様々なことを書かれていた児童と比較的近い内容のことを複数人に書かれ

ていた児童がそれぞれいた。様々なことを書かれていた児童は、自分の特徴を多面的捉えることができ、比較的近い内容のことを複数回書かれていた児童は、書かれた内容を自分の特徴として確信をもって認識しやすいと考えられる。今回の授業で行なったこの活動は、学級での子どもたちの関係が安定している場合に効果を発揮すると考えられる。前述の通り、普段から他の人の良いところを伝える活動があったため、活動が活発になった。学級での子どもたちの関係が不安定な場合、活動の活発さに欠けたり、他の人を傷つける行為が生じたりする可能性がある。日頃の学級経営と道徳の時間が密に関係していると感じた。

どちらの学年も何もせずに自分の良さを書ける児童は多くなかった。自分の良さとはどのようなものか考えられるような、自覚できるような活動を普段から行なっていく必要がある。他の人から自分の良さを伝えてもらえる機会もちろん重要だが、自分で自分自身のことを振り返る機会を増やしていくことも重要だと考える。道徳の時間だけではなく、学級の時間や、他教科でも自己を振り返る機会を増やしていく必要がある。

②道徳性を学ぶ意義についての考察(文献研究を通して)

②-1 内容項目：「感謝」

この項目では、日々の生活は、多くの人々の支えがあることを考え、広く人々に尊敬と感謝の念をもつことを扱っている。主として人との関わりに関することとして扱われており、支えに気づき、自分も役立とうとする心情や態度が重要視されていると考えられる。

「感謝」を学ぶ意義

村上ら(2016)は対人の感謝について述べており、他人を認めることと感謝は相互に影響すると考察している。また、市下、野田(2022)では対人と人以外を対象とした感謝について述べている。自身を成長させてくれた「野球」など「ことやもの」といった、人以外を対象とした感謝によって、ストレスが減少するという結果にいたっている。

道徳の時間を使って、感謝について介入を行うことで、児童生徒の学校適応や学級適応につながると考えられる。そして感謝を道徳で扱うことの意義は、こうした児童の学校適応や学級適応を高めることにもあると考える。

「感謝」を考える範囲

浅部(2020)は「感謝」を扱う小学校教科用図書教材の分析を行っている。「また、道徳では感謝について考える範囲を徐々に広げていくとしている。小学校学習指導要領(平成29年告示)解説の道徳編では感謝の対象を、第1・2学年で、家族など身近な人々、第3・4学年で、家族など生活を支えてくれている人々や現在の生活を築いてくれた高齢者、第5・6学年で、家族や過去からの多くの人々に加え、その支え合いや助け合い自体に対してとなる。浅部(2020)は感謝の対象を図4のように表している。

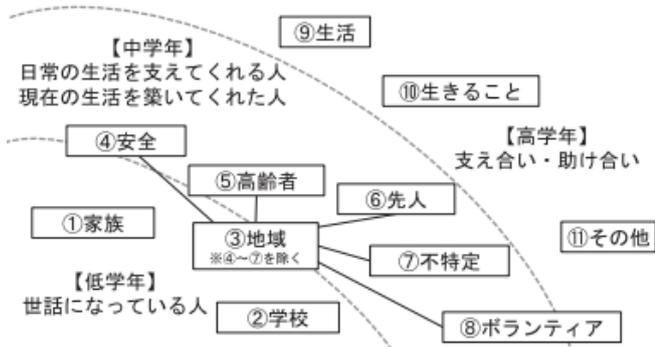


図4 小学校道徳で扱う感謝の範囲 浅部(2020)

このように、小学校の道徳では、感謝の対象を段階的に広げている。身近なところから考えていくことで、感謝を感じやすくし、徐々に広い視点で自分の生活をj考えて感謝を感じられるようにする工夫だと考えられる。

一方で、市下、野田(2022)で、人を対象とした感謝は、楽観性は上昇する結果だったが、ストレスは減少するとは言えなかった。これは、人を対象とした感謝を感じる際には、感謝以外にも申し訳なさやすまなさなど、負の感情を引き起こし、ストレスの減少を抑制してしまうと考えられる。人に対する感謝は、感謝以外にも様々な感情が含まれていると考えられる。

「感謝」の項目での対象の多くは人に対するものになっている。これは、感謝について考える際に、具体的なものを対象にすることで、考えやすくすることが影響していると考えられる。また、「感謝」の内容項目はよりよい人間関係を築く上で必要な項目であるとしている。そのため、「人」を対象とした感謝を多く扱っていると考えられる。しかし、人に対する感謝には、感謝以外にも様々な感情が入っている。教員が意識をして「感謝」を取り上げて、児童に考えさせていく必要がある。

②-2 内容項目：「よりよく生きる喜び」

この項目では、よりよく生きようとする人間のよさを見だし、人間として生きる喜びを感じることを扱っている。主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関することとして扱われている。ここで扱う「人間として生きる喜び」とは、弱い自分を乗り越えるだけでなく、自分の良心に従って生きることであり、人間のすばらしさを感じ、よりよく生きていこうとする深い喜びである。

指導の内容

この内容項目は、小学校5・6年生から指導が行われる。教育出版が出している道徳の検定教科書では、この項目は第5学年で2つの題材、第6学年で1つの補助教材と2つの題材がある。第5学年では「花に思いをこめて—星野富弘—」で自分の生き方について考え、「一人はみんなのために」で自分の生き方と他者との関わり方について考えている。この2つの題材はどちらも自分の生き方に対して葛藤する場面がある。この葛藤場面を通して、自分の弱さについて考えることができると考えられる。その上で、葛藤

を乗り越えて生きることを考えることで、自分の生き方について考える機会になると考える。第6学年では補助教材から「日本を守るために—江戸城無血開城—」、「六千人の命のビザ—杉原千敏—」で自分の生き方と社会を関連させ、より良い社会とはなにか考える流れとなっている。ここではどちらも歴史上の出来事から生き方について考える内容である。2学年を通してまず、自分について考え、そこから考える範囲を広げている。自分の生き方について考えてから、その生き方から社会に繋げていくことができると考える。

「よりよく生きる喜び」を学ぶ意義

「よりよく生きる喜び」を道徳の時間で扱う意義として、児童・生徒の自殺防止にあると考える。文部科学省は、令和3年度の自殺した児童・生徒の人数を368人と公表しており、増加傾向にある。



活の充実」では多様な家族の形や家族との関係について考える機会として、「よりよく生きる喜び」では自分の生き方について考えることを通して、人生に価値を見出すことに、「個性の伸長」では自分の特徴を捉え自己肯定感の上昇につながる機会を作ることにより意義があると考えられる。しかし、それぞれに意義があったとして、その意義が児童に伝わっていないと意味がないと考える。なぜ、道徳の時間があるのか、なぜこの内容について考えるのか、児童に伝わることで、児童が道徳の時間に対して主体的な態度をとるようになるかと考える。児童に意義を伝えるためには、まず教員が意義について理解していないといけない。そのため、今回の研究で、内容の意義について考えることは重要であったと考える。

今後の展望

今回は小学校の道徳の内容項目のうち、6つの内容項目に絞って考えていった。本来小学校で扱う内容項目は22ある。今後は、今回扱えなかった項目も含め、より深く考察していきたい。また、項目1つ1つは独立しきったものではなく、項目同士で関わり合っている。内容項目同士の関わりについても考えていきたい。道徳の内容だけではなく、道徳と他教科との関連についても考察していく必要があると考える。実際に小出、片岡、荒井の小学校低学年における児童の自己肯定感を高める授業の試みー特別の教科道徳と体育の教科横断的な取り組みからー(2021)では道徳と体育を組み合わせさせてある。他教科や学級経営と道徳の時間がどのように連携できるか考えていきたい。道徳の意義だけではなく、実地研究の経験を踏まえて、道徳教育の指導についても考えていった。同じ内容項目、同じ教材を複数の学級で行なった。同じ内容でも学級が異なると反応や話の流れが変わることを痛感した。それぞれの学級の特徴を捉え、どのように授業を構築したら児童が内容項目について考えやすいか研究する必要がある。自身の実践だけではなく、様々な実践例を分析していき、よりよい道徳教育の指導について考えていきたい。

参考引用文献

- 1) 文部科学省(2018). 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編. 廣済堂あかつき株式会社.
- 2) 教育出版(2019). 小学どうとく 1-6 はばたこう明日へ. 教育出版.
- 3) 赤堀博行(2021). 道徳的価値の見方・考え方. 東洋館出版社.
- 4) 浅部航太(2020). ねらいの明確化の支援に向けた「感謝」を扱う小学校教科用図書教材の分析. 道徳と教育. 338巻. p27-39.
- 5) 村上達也, 藤原健志, 西村多久磨(2016). 小学生における対人的感謝と学級適応との関連. カウンセリング研究. 49巻. 2号. p85-95.
- 6) 市下 望, 野田 哲朗(2022). 対人・非対人的感謝介入が小

学生の学校適応に及ぼす効果に関する検討. 教育心理学研究. 70巻. 1号. p87-99

- 7) 総務省統計局(2021). “令和2年国勢調査 人口等基本集計結果 結果の概要. 統計局ホームページ”.
https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/kekka/pdf/outline_01.pdf. (2022/01/23).
- 8) 増田彰則, 山中隆夫, 武井美智子, 平川忠敏, 志村正子, 古賀靖之, 鄭忠和(2004). 家族機能が学校適応と思春期の精神面に及ぼす影響について. 心身医学. 44巻. 12号. p903-909
- 9) 文部科学省(2022). “令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要”. 文部科学省.
https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_2.pdf. (2023/01/27).
- 10) 新村出編(2018). 広辞苑. 第7版. 岩波書店. p351. 国立女性教育会館(2006). 平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査報告書. 国立女性教育会館.
- 11) 厚生労働省(2022). “令和3年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数(速報値)”. 厚生労働省.
<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000987725.pdf>. (2023/01/27).
- 12) 河越麻佑, 岡田みゆき(2015). 大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因. 日本家政学会誌. 66巻. 5号. p222-233.
- 13) 小出真奈美, 片岡千恵, 荒井信成(2021). 小学校低学年における児童の自己肯定感を高める授業の試みー特別の教科道徳と体育の教科等横断的な取り組みから-. 日本健康教育学会誌. 29巻. 1号. p61-69.
- 14) 山下健一, 小野史典(2017). 性格特徴の言語化が自己肯定感に与える影響. 日本心理学会発表論文集. 81回. p725.
- 15) 大島聖美(2013). 夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差. 発達心理学研究. 24巻. 1号. p55-65.
- 16) 内閣府(2014). “平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査”. 内閣府.
https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/12927443/ww8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf_index.html. (2023/12/29).
- 17) 内閣府(2019). “我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(平成30年度)”. 内閣府.
<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/12927443/ww8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index.html>. (2024/01/09).